



●オークション業界での日本の美意識

オークション業界においては「デロリ」の系譜という美意識がある（山口桂『美意識を磨く—オークション・スペシャリストが教えるアートの見方—』平凡社新書 952、2020年を参照）。デロリとは、近代洋画家、岸田劉生（1891-1929年）の造語で、奇怪で不気味・変態的・グロテスクな世界を表す。

山口（2020）は、絵画の見方の基本は心を揺り動かすことで、一流のものや本物を無心で見ることが基本と指摘する。気に入ったものは近づいて見ること、絵は全体で見るとし、自分が好きかどうかを考えながら各部屋を巡り、一部屋で一番好きな絵を決め、その絵に戻る、好きな理由は色彩か構図か画題か人物の顔かを考え、自分の好きな絵や画家に出会うことが大切で、愛と死、美と醜、絢爛と陰鬱が共存する世界の存在を指摘する。

日本の古美術は「用の美」と密接に関連しており、刀の鐔（つば）や屏風・扇・硯箱、金継ぎも、その系譜にあると指摘する。日本の美の中心にあるのは「不揃い」とする小泉八雲の考えも紹介し、不在が却って存在を強く意識させるという美意識や繊細さについても言及している。 （吉村耕治）

●色名雑感 色鉛筆のネーミング

企業が付ける色名には楽しいものが多数あり、文房具の世界でもオリジナリティあふれる色名が付いた商品がたくさんあります。

その中でも特にユーモアのある色名が付けられているのが、株式会社フェリシモが販売している『500色の色鉛筆』です。お持ちの方も多いのではないのでしょうか。

1992年に第一弾が発売され、第二弾、第三弾を合わせて10万セット、5千万本が世界55か国で発売され、完売しました。

世界中からの要望を受けて2009年から東京葛飾区の工場で復刻されている『500色の色鉛筆 TOKYO SEED』の色名は「LOVE」「FUN」など25のテーマに分かれていて、英名と日本語名の2つが記されています。例えばピンク系では「PRINCESS DIARY（夢見るお姫さまの秘密の日記色）」、「COSMOPOLITAN CRUSH（コスモポリタンの秘めた恋の色）」、「PRETTYPIGGY（開けるのが楽しみ 小ブタの貯金箱の色）」など、遊び心が効いています。

色という視覚からだけでなく、色名からも楽しい気分になる仕掛けがなされています。
https://www.felissimo.co.jp/500/themes.cfm?iid=p_fcp_THEMES# （橋本実千代）

●色名雑感 たけくらべ

樋口一葉（1872-1943）は、明治時代の女流小説家であり、文学で身を立てようとした一葉は半井桃水に師事し、明治27年5月、本郷の丸山町に住み、亡くなるまでの2年6か月という短期間に、「たけくらべ」や「にごりえ」といった珠玉のような名作を書き、24歳8か月の若さでこの世を去りました。

一葉の表現が大好きなので、女性の服飾を表す色名を含む文章をそのまま引用します。

「小ざっぱりとせし唐棧ぞろいに**紺足袋**はきて、」「**柿色**に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、」「**黒縹子**と染分絞りの晝夜帯胸だかに、」「見聞くは三味に太鼓にあけ**紫のなり形**、」「はじめ**藤色絞り**の半襟を袷にかけて着て歩るきしに」「単衣は**水色友仙**の涼しげに、」「**白茶金らん**の丸帯少し幅の狭いを結ばせて、」「美登利みかねて我が**紅の絹はんけち**を取出し、」「**赤えり赭熊**に襦かけの裾ながく、」「**衣の白地の紅に染む事無理ならず**、」「六つ五つなる女の子に**赤襷**させて、」「**紅入り友仙**の雨にぬれて」「**紅入り友仙**は可憐しき姿を空しく格子門の外にと止めぬ、」

「たけくらべ」には、19の色名が使われ、その用例は57例にのぼります。女流らしく男性を上回る用例が見られます。 （永田泰弘）